

気のいい火山弾

宮沢賢治

青空文庫

ある死火山のすそ野のかしわの木のかげに、「ベゴ」というあだ名の大きな黒い石が、永いことじいとすわつっていました。

「ベゴ」と云う名は、その辺の草の中にあちこち散らばつた、稜のあるあまり大きくない黒い石どもが、つけたのでした。ほかに、立派な、本とうの名前もあつたのでしたが、「ベゴ」石もそれを知りませんでした。

ベゴ石は、稜がなくて、丁度卵の両はじを、少しひらたくのばしたような形でした。そして、ななめに二本の石の帯のようなものが、からだを巻いてありました。非常に、たちがよくて、一ぺんも怒つたことがないでした。

それですから、深い霧がこめて、空も山も向うの野原もなんにも見えず退くなつた日は、稜のある石どもは、みんな、ベゴ石をからかつて遊びました。

「ベゴさん。今日は。おなかの痛いのは、なおつたかい。」

「ありがとう。僕は、おなかが痛くなつたよ。」とベゴ石は、霧の中でしづかに云いました。

「アアハハハハ。アアハハハハ。」稜のある石は、みんな一度に笑いました。

「ベゴさん。こんちは。ゆうべは、ふくろうがお前さんに、とうがらしを持つて来てやつたかい。」

「いいや。ふくろうは、^{ゆうべ}昨夜、こつちへ来なかつたようだよ。」

「アアハハハハ。アアハハハハハ。」稜のある石は、もう大笑いです。

「ベゴさん。今日は。昨日の夕方、霧の中で、野馬がお前さんに小便をかけたろう。気の毒だつたね。」

「ありがとう。おかげで、そんな目には、あわなかつたよ。」

「アアハハハハ。アアハハハハハ。」みんな大笑いです。

「ベゴさん。今日は。今度新らしい法律が出てね、まるいものや、まるいようなものは、みんな卵のように、パチンと割つてしまつそうだよ。お前さんも早く逃げたらどうだい。」「ありがとうございます。僕は、まんまる大将のお日さんと一しょに、パチンと割られるよ。」

「アアハハハハ。アアハハハハハ。どうも馬鹿で手がつけられない。」

丁度その時、霧が晴れて、お日様の光がきん色に射し、青ぞらがいっぱいにあらわれましたので、稜のある石どもは、みんな雨のお酒のことや、雪の団子のことを考えはじめました。そこでベゴ石も、しづかに、まんまる大将の、お日さまと青ぞらとを見あげました。

その次の日、又、霧がかかりましたので、稜石どもは、又ベゴ石をからかいはじめました。実は、ただからかつたつもりだつただけです。

「ベゴさん。おれたちは、みんな、稜がしつかりしているのに、お前さんばかり、なぜそんなにくるくるしてゐるだろうね。一緒に噴火のとき、落ちて来たのにね。」

「僕は、生れてまだまつかに燃えて空をのぼるとき、くるくるくるくる、からだがまわつたからね。」

「ははあ、僕たちは、空へのぼるときも、のぼる位のぼつて、一寸ちよつととまつた時も、それから落ちて来るときも、いつも、じつとしていたのに、お前さんだけは、なぜそんなに、くるくるまわつたろうね。」

その癖くせ、こいつらは、噴火で碎くだけて、まつくりな煙けむりと一緒に、空へのぼつた時は、みんな氣絶していたのです。

「さあ、僕は一向まわろうとも思わなかつたが、ひとりでからだがまわつて仕方なかつたよ。」

「ははあ、何かこわいことがあると、ひとりでからだがふるえるからね。お前さんも、ことによつたら、臆病おくびょうのためかも知れないよ。」

「そうだ。臆病のためだつたかも知れないね。じっさい、あの時の、音や光は大へんだつたからね。」

「そうだろう。やつぱり、臆病のためだろう。ハツハハハハツハ、ハハハハハ。
稜かびのある石は、一しょに大声でわらいました。その時、霧がはれましたので、角かどのある石は、空を向いて、てんでに勝手なことを考えはじめました。

ベゴ石も、だまつて、柏かしわの葉のひらめきをながめました。

それから何べんも、雪がふつたり、草が生えたりしました。かしわは、何べんも古い葉を落して、新らしい葉をつけました。

ある日、かしわが云いました。

「ベゴさん。僕とあなたが、お隣となりになつてから、もうずいぶん久しいもんですね。」

「ええ。そうです。あなたは、ずいぶん大きくなりましたね。」

「いいえ。しかし僕なんか、前はまるで小さくて、あなたのことを、黒い途方とほうもない山だと思つていたんです。」

「はあ、そうでしょうね。今はあなたは、もう僕の五倍もせいが高いでしょうね。」

「そう云えればまあそうですね。」

かしわは、すっかり、うねぼれて、枝えだをピクピクさせました。

はじめは仲間の石どもだけでしたが、あんまりベゴ石が気がいいので、だんだんみんな馬鹿まづこにし出しました。おみなえしが、斯このう云いました。

「ベゴさん。僕は、とうとう、黄金きんのかんむりをかぶりましたよ。」

「おめでとう。おみなえしさん。」

「あなたは、いつ、かぶるのですか。」

「さあ、まあ私はかぶりませんね。」

「そうですか。お気の毒ですね。しかし。いや。はてな。あなたも、もうかんむりをかぶつてるではありませんか。」

おみなえしは、ベゴ石の上に、このごろ生えた小さな苔こけを見て、云いました。

ベゴ石は笑つて、

「いやこれは苔ですよ。」

「そうですか。あんまり見ばえがしませんね。」

それから十日ばかりたちました。おみなえしはびっくりしたように叫びました。

「ベゴさん。どうとう、あなたも、かんむりをかぶりましたよ。つまり、あなたの上の苔

がみな赤ずきんをかぶりました。おめでとう。」

ベゴ石は、にが笑いをしながら、なにげなく云いました。

「ありがとうございます。しかしその赤頭巾あかずきんは、昔のかんむりでしょう。私ではありません。私の冠かんむりは、今に野原いちめん、銀色にやつて来ます。」

「このことばが、もうおみなえしのきもを、つぶしてしまいました。

「それは雪でしよう。大へんだ。大へんだ。」

ベゴ石も気がついて、おどろいておみなえしをなぐさめました。

「おみなえさん。ごめんなさい。雪が来て、あなたはいやでしようが、毎年のこと仕方もないのです。その代り、来年雪が消えたら、きっとすぐ又いらつしゃい。」

おみなえしは、もう、へんじをしませんでした。又その次の日のことでした。蚊かが一疋ぴきくうんくうんとうなつてやつてきました。

「どうも、この野原には、むだなものが沢山たくさんあつていかんな。たとえば、このベゴ石のようなものだ。ベゴ石の「ご」ときは、何のやくにもたたない。むぐらのようにつちをほつて、空氣をしんせんにするなどもしない。草つぱのように露つゆをきらめかして、われわれの目の病をなおすなどもしない。くううん。くううん。」と云いながら、又向うへ飛

んで行きました。

ベゴ石の上の苔は、前からいろいろ悪口を聞いていましたが、ことに、今の蚊の悪口を聞いて、いよいよベゴ石を、馬鹿にしました。

そして、赤い小さな頭巾をかぶつたまま、おどり踊りはじめました。

「ベゴ黒助、ベゴ黒助、

黒助どんどん、

あめがふつても黒助、どんどん、
日が照つても、黒助どんどん。

ベゴ黒助、ベゴ黒助、

黒助どんどん、

千年たつても、黒助どんどん、
万年たつても、黒助どんどん。」

ベゴ石は笑いながら、

「うまいよ。なかなかうまいよ。しかしその歌は、僕はかまわないけれど、お前たちには、

よくないことになるかも知れないよ。僕が一つ作ってやろう。これからは、そつちをおやり。ね、そら、

お空。お空。お空のちちは、
つめたい雨の ザアザザザ
かしわのしずくトンテントン、
まつしろきりのポツシャントン。

お空。お空。お空のひかり、

おてんとさまは、カンカンカン、
月のあかりは、ツンツンツン、
ほしのひかりの、ピツカリコ。」

「そんなものだめだ。面白くもなんともないや。」

「そうか。僕は、こんなこと、まずいからね。」

ベゴ石は、しづかに口をつぐみました。

そこで、野原中のものは、みんな口をそろえて、ベゴ石をあざけりました。
「なんだ。あんな、ちっぽけな赤頭巾に、ベゴ石め、へこまされてるんだ。もうおいらは、

あいつとは絶交だ。みつともない。黒助め。黒助、どんどん。ベゴどんどん。」

その時、向うから、眼めがねをかけた、せいの高い立派な四人の人たちが、いろいろなピカピカする器械をもつて、野原をよこぎつてきました。その中の一人が、ふとベゴ石を見て云いました。

「あ、あつた、あつた。すてきだ。實にいい標本だね。火山彈の典型だ。こんなととのつたのは、はじめて見たぜ。あの帶の、きちんとしてることね。もうこれだけでも今度の旅行は沢山だよ。」

「うん。實によくととのつてるね。こんな立派な火山彈は、大英博物館にだつてないぜ。」
みんなは器械を草の上に置いて、ベゴ石をまわつてさすつたりなりました。

「どこの標本でも、この帶の完全なのはないよ。どうだい。空でぐるぐるやつた時の工合が、實によくわかるじやないか。すてき、すてき。今日すぐ持つて行こう。」

みんなは、又、向うの方へ行きました。^{かど}稜のある石は、だまつてため息ばかりついています。そして氣のいい火山彈は、だまつてわらつて居りました。

ひるすぎ、野原の向うから、又キラキラめがねや器械が光つて、さつきの四人の学者と、村の人たちと、一台の荷馬車がやつて参りました。

そして、柏の木の下にとまりました。

「さあ、大切な標本だから、こわさないようにして呉れくれたま。よく包んで呉れくれたま。昔な
んかむしってしまおう。」

昔は、むしられて泣きました。火山弾はからだを、ていねいに、きれいな藁わらや、むしろ
に包まれながら、云いました。

「みなさん。ながながお世話でした。昔さん。さよなら。さつきの歌を、あとで一ぺんで
も、うたつて下さい。私の行くところは、ここのように明るい楽しいところではあります
。けれども、私共は、みんな、自分でできることをしなければなりません。さよなら。
みなさん。」

「東京帝国大学校地質学教室行ふだ、」と書いた大きな札がつけられました。

そして、みんなは、「よいしょ。よいしょ。」と云いながら包みを、荷馬車へのせまし
た。

「さあ、よし、行こう。」

馬はプルルルと鼻を一つ鳴らして、青い青い向うの野原の方へ、歩き出しました。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1995（平成7）年5月30日11刷

入力：蔣龍

校正・noriko saito

2008年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

気のいい火山弾

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>